

地場産農作物を学校給食に
提供する動きが拡大

健康な食生活

食品選択
安全性
表示のしくみ

幼児・学童期の人間形成や健康な食生活と食習慣の確立に役立てようとする教育運動に発展

食をめぐる諸問題が社会・環境問題とともに顕在化

1 食育の語源と進化の経緯

1898年（明治31）

石塚左玄(いづつかさげん) (1851—1909) が『通俗食物養生法』のなかで「今日、学童をもつ人は、**体育も智育も才育もすべて食育にあると認識すべき**」と表現。

1903年（明治36）

村井弦齋(むらいげんさい) 著の『食道楽』。「小児には**徳育よりも、智育よりも、体育よりも食育が先**。体育、徳育の根元も食育にある」。歴史的にも長い間、どの家庭でも子育てとしてつけの基本であった。

第二次大戦後

高度成長・バブル

1990年以前

日本の食生活が大きく変化した時代を経て、1990年代に入るまでは、「食育」がたいせつであるという認識は、あまり強くもたれなかった。

1990年代後半

食は健康の源であり、身体に必要で安全なものを選んで食べていくことは、生命のあり方に直結するという認識が、高まってきた。食の安心や安全が求められる時代へと変わる。

食意識転換の要因

- ・家庭での食事が健全なかたちを維持できなくなってきた状況
- ・軽食の増加などにより学童の咀嚼(そしゃく)回数が著しく低下した状況
- ・若年層の血糖値の高数値化と糖尿病予備軍化ともいえる状況

日本の食生活の問題が社会的に認識される

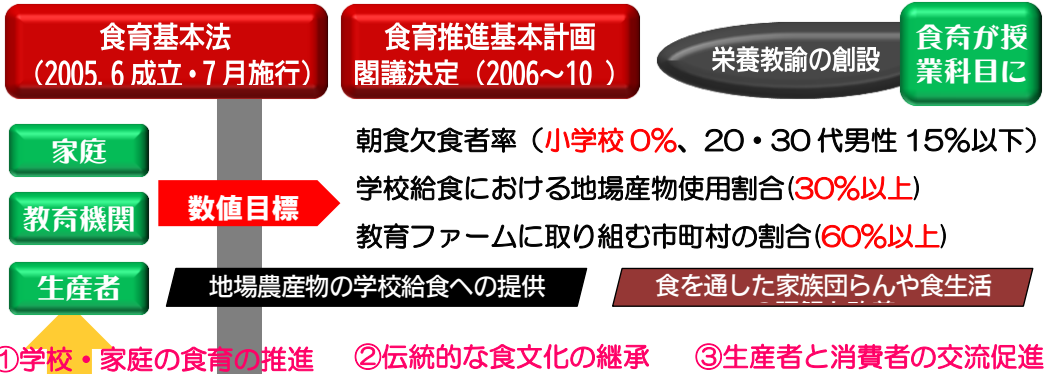
海外から、スローフード、スローライフ、ロハス LOHAS といった概念やキーワードが日本に紹介され、社会的流行となり、広く受け入れられたことも一因

見えるロジカルシンキング!

図解ステーション

図解リーフレット

新聞de元気山口編集La★bo



食を考えるきっかけ

- 生活様式
- 自給率
- 食料輸入
- 外食産業
- 安全

地球環境の悪化や食生活を取り巻く状況の変化

生活様式の多様化、食料自給率の低さ、増大する海外からの食料輸入、外食産業の巨大化などが進むなか、食生活は飽食(ほうしょく)と孤食(こしょく)の傾向を強め、脂質の過剰摂取などからくる栄養バランスの偏り、生活習慣病の増加、食料資源の浪費などが問題に。

食をめぐる諸問題が社会・環境問題とともに顕在化

BSE (牛海綿状脳症) や食品表示などの「食の安全」に関わる問題

国、都道府県、市町村それぞれに食育推進会議、都道府県食育推進会議、市町村食育推進会議を設置することを推奨。

栄養素を本能的に感じ、グルメ志向ではなく「食べる意味を考え、おいしく食べよう」を念頭に置いた食育推進活動の実施。

地方自治体⇒食育推進計画 親子料理教室の開催や地域の特色を生かした学校給食

食生活指針 (2000.3)

日本独自

- 1.食文化や地域の産物を活かし、ときには**新しい料理**も採り入れる。
- 2.調理や保存を上手にして**無駄や廃棄を少なく**する。

諸外国共通

- (1)食事を楽しむこと
- (2)野菜や穀物、果実、豆や乳製品、魚などをバランスよく組み合わせる。脂肪を含む食材や塩を控える。

- 身土不二
- 地産地消
- 食料自給
- 地球環境の保全

コトバンク

掲載記事を図解化

食育 (読み) しょくいく

インサイドセールス

解説型 Web サイト構築

